

子どもの民俗行事と地域の活性：柳川の観光ひな祭り と女性の「さげもん」細工

坂元，一光
九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門：准教授

<https://doi.org/10.15017/7376513>

出版情報：国際教育文化研究. 9, pp.39-49, 2009-07-07. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



子どもの民俗行事と地域の活性

ー柳川の観光ひな祭りと女性の「さげもん」細工ー

坂元 一光

はじめに

福岡県柳川市では女兒の初節句行事であるひな祭りとそこに飾られる「さげもん」（ちりめん細工）が観光資源として用いられ、女性の伝統技能の再評価と地域社会の活性に重要な役割を果たしている。「さげもん」は地元で古くから伝わる手芸細工であり、初節句を迎えた女兒のために母親や祖母らが子どもの無事な成長を祈って手作りし、ひな人形とともに吊るし飾る。観光を契機とする同地の子どもの民俗行事と女性の伝統工芸の新たな展開は、地元の女性や地域の人びとの生活にもさまざまな影響を及ぼしている。小論ではふるさとや民俗の資源化という現代日本社会の地域文化の新しい局面に着目しつつ、女性の伝統技能と結びついた子どもの民俗が地域社会の再編や女性のエンパワーメント等に果たす役割について簡単なスケッチを試みる。

1. 柳川の「さげもんひな祭り」

近年、行政による地域振興政策の一環として地域の民俗や伝統行事を観光事業に活用し、観光客の誘致や関連産業の創出をすすめる取り組みが全国的におこなわれている（注1）。春の観光シーズンの到来とともに、九州一円で展開される女兒の初節句の伝統行事「ひな祭り」の観光事業もそのひとつの例である。福岡県柳川市でも同様の取り組みがおこなわれており、生活の一環としてあった子どもの初節句祝いとさげもんが観光客や行政関係者の熱いまなざしのもとで新しい展開を見せている。そこには行政の観光振興政策のなかで家庭の生活習俗であるひな祭りが地域の「観光ひな祭り」として新たに再構築される過程がみられる。それはまた女性の伝統技能の再評価やさげもん作りの活発化をうながし、地域に生きる女性たちの生活や意識にも影響を及ぼしている。

柳川のひな祭り行事の特徴はひな人形の展示とともに華麗な「ちりめん細工」のさげもんを吊るし飾りとして用いる点である。ここでいう「ちりめん細工」とは江戸から明治にかけ富裕層の女性を中心に、縮緬（ちりめん）布を用いて作られた一群の裁縫お細工物で、当時の着物に用いられた縮緬の端切れを縫い合わせて作った実用の袋小物や各種の小箱、懐中物、飾り物を指す。戦後、一時衰退の危機に陥ったが井上重義氏（日本玩具博物館館長）による再発見と積極的な普及活動によって復興の兆しをみせつつある。（井上 2008、2004）。柳川のさげもん

もこのちりめん細工の手工芸の伝統に連なるものと考えられている。女兒の初節句を迎えた家庭には、ひな人形の壇飾りの左右に縁起物の動植物や人形をかたどったさげもんが円形のすだれ状に吊り下げられ、祝いの空間に華やかな彩りを添える。さげもんは女兒が生まれた家の母親や祖母がその子の無事な成長と幸せを祈りつつ手作りで準備した。近隣や親戚の女性たちもこれを手作りし祝いの品として贈ってきた。この習俗は現代にも引き継がれ手芸や裁縫に心得のある女性は手作りのさげもんを贈っている。

しかし、地元の生活習俗として続いてきた「さげもんひな祭り」にたいしては、近年これを観光資源として地域振興に活用する動きがすすんでいる。その結果、人びとの生活行事としてあった柳川のひな祭りは新たな地域イベントとして再構築されつつある。そこには柳川のひな祭りやさげもん作りをめぐるさまざまな実践や意味付けにおける輻輳化と重層化の過程が見出される。

2. 日本の裁縫文化における「さげもん」

さげもんは柳川に古くから伝わるひとつの民俗工芸（民具）であり日本女性の手芸文化のなかに位置づけられ、歴史的には江戸期の富裕層の女性によって作られていた「裁縫お細工物」と呼ばれる手芸品に由来する。井上（2004、2008）や尾崎（2008）によれば、縮緬の着物の端切れを用いて作られたお細工物は、袋物（香、琴爪などの入れ物）、玩具、御守り、女性のアクセサリとして江戸期の富裕な武家や商家の女性の間で作られはじめた。明治から大正時代にかけては家庭以外でも女学生のための家政教育の教材としても用いられた。着物の古着や端切れを再生利用するお細工物づくりにおいては、当時の女性の儉約精神や裁縫の技術、あるいは女性的美意識を身につけるための教材としての役割が期待されていた。その後、これらの裁縫お細工物はとくに戦後の衣服や生活様式の変化によってすたれていくが、先述したように日本玩具博物館の井上重義を中心にちりめん細工の復興・普及活動がすすめられ、現在では各地のカルチャーセンターや趣味講座などを中心にふたたび女性たちの注目と関心を集めつつある（注2）。

3. 産育習俗と「さげもん」の民俗表象

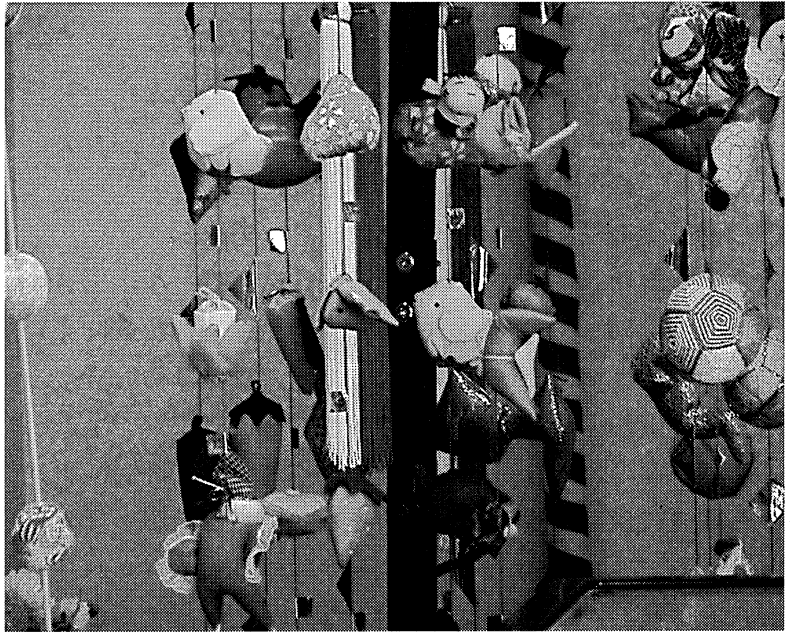
産育儀礼としての性格を持つ子どもの初節句の祝い品のさげもんには女兒の産育をめぐるさまざまな観念や期待が込められている。さげもん輪に吊り下げられた49種の動植物や人形の手芸品には、それぞれ女兒や子どもへの願いや期待がシンボリックに表象されている。まず女兒にジェンダー化された形象を挙げてみると、例えば

鼠	・・・子沢山
金魚、蝶	・・・艶やかさ
鶏	・・・早起き
蟬	・・・忍耐

蛤 …… 二夫にま
みえず
唐辛子 …… 虫よけ

などの形象が見いだされる。
また子ども一般の成長や幸福
をねがう形象としては、以下
のものが挙げられる。

猿 …… 災厄除
ひよこ …… あどけなさ
うさぎ …… 快活
鶴、海老 …… 長寿
瓢箪 …… 無病息災
這い人形 …… 成長



< 柳川のさげもん細工 >

個々のさげもん細工の解釈には諸説あるが、基本的には子ども（女兒）に期待される資質や特徴および人生の幸福にむすびつくシンボリズムから構成されているといえよう。興味深いのはさげもん和歴史的に関連の深いちりめん細工にも子どもの招福や魔除け、御守りや迷子札などや産育にかかわる品々が数多く見出せる点である（尾崎 2008）。さげもんにしろちりめん細工にしろ、それらが子どもの産育に直接かかわる女性によって作られる細工物であるということを考えるならば、そこに親密な母子関係にもとづいた子どもへの期待や願いが共通に表現されたとしても決して不思議ではない。民俗学の大藤ゆきも三月節句の雛壇の傍に母や祖母手作り小猿の細工物を 33 匹吊り下げる鹿児島枕崎の習俗のなかに子どもに対する母や祖母の同様の思いを見出している（大藤 1999 : 229）（注 3）。

4. 家庭行事の地域イベント化

① 家庭行事の空間的再編

柳川のひな祭り行事は各家庭の生活習俗として私的空間を中心におこなわれてきた。近年、家庭の私的行事としておこなわれていた同地のひな祭りが、観光開発のコンテクストのなかで、広く地域や観光客を巻き込んだ地域行事（イベント）的側面を持つようになってきている。例えば、期間中、一部の初節句の家庭ではさげもんやひな人形で飾った自宅に観光客や地元民を招き入れる。またすでに初節句を終えた家庭のなかにも自宅の居間を開放して自慢の人形やさげもんを披露するところもあり、家庭行事を地域社会に開いてゆくイベント化の傾向が見出される。すべての初節句の家庭が自宅を開放しているわけではないけれども、商店街も巻き込んだ 2 ヶ月余の観光事業期間は同地のひな祭りに家庭領域を超えた地域的な広がりや特別な雰囲気を与えている。柳川では観光用と個人用のひな祭りが同時並行で進行している。日本の伝統習俗で

あるひな祭りを地域の観光資源として活用する取り組みをひとまず「観光ひなまつり」と呼ぶとするならば、そこには私的行事としての各家庭のひな祭り（「生活ひな祭り」）と地域イベント化した「観光ひな祭り」との相互浸透的な文化過程のダイナミズムが展開している。

②「観光ひなまつり」のネットワーク化

今日の柳川のひな祭りには地域を超えたより広域的イベント化の次元も見出される。生活ひなまつりはその観光資源化によってさらなる広がりを見せている。柳川のひな祭りには、九州各地のひな祭り行事とのネットワーク化（行事を介した地域間連携）や「つるし飾り」習俗にもとづく全国的なネットワーク化など地域を超えた連携も見られ、それは全九州あるいは全国レベルのより広域的な民俗観光イベントのなかにも位置づいている。

日本の伝統的習俗であり女兒の初節句祝いの行事であるひな祭りは、柳川のみならず九州各地で地域振興のために再構築され、いうならば「観光ひなまつり」として観光資源化されている。各地域ではそれぞれ独自の歴史的民俗的特徴をアピールした表象化や実践の取り組みがなされる一方で、これらの行事を九州全体の季節イベントとしてネットワーク化しその観光資源化をより効果的に推し進める試みもなされている。

福岡県の八女市役所内に事務局をおく「九州ひなまつり広域振興協議会」は、九州各地で開催される観光ひなまつりを一冊のガイドブック（『ひなの国九州―絢爛豪華な春が来る―』）にまとめ、各地の観光施設等で観光客に配布して九州全域のひな祭り行事の紹介に供している。ガイドブックには鹿児島市、人吉市、飯塚市、杵築市、うきは市、柳川市、八女市、日田市、綾町、中津市、佐賀市、平戸市で開催される各観光ひなまつりが美しい写真やグラビア印刷によって紹介され、さらに観光客には各地のひなまつりをめぐると促すスタンプラリーの企画も設けられている。そこには期間中、観光客を複数個所のひなまつりに誘導し、個別地域の観光客の増加のみならず九州全域の観光客数の底上げにつなげようとする協議会の戦略が見出される。

こうした観光ひなまつりのネットワーク化の取り組みは、まず九州各地の行事を一冊のガイドブックにまとめて取り上げることとおして、地域間の比較にもとづくひな祭りの地域ごとの固有性や魅力を一層きわだたせている。またガイドブックやウェブサイトをとおして各地の行事の多様性と関係性を具体的、視覚的に示すことで、観光客自身が体験的に行事間の比較を楽しめるよう企画を準備し、結果的に各地域や九州全域の相乗的な観光効果を生み出すよう考えられている。柳川のひな祭りはさげもんという伝統的手工芸をともなう地域特性を主張しつつも、一方で九州全体を包含する広域的ひな祭りイベントのなかに自らを位置づけているのである。

③「つるし飾り」習俗のネットワーク化

柳川の観光ひな祭りの最大の特徴はさげもんという独自の手工芸をともなう点である。市販のひな人形飾りにさげもんが添えられることにより行事の固有性と手作り感が加わる。さげもんはちりめん細工を天井からつるす飾り物の習俗あるいは民具であり、柳川以外では全国に二ヶ所ほど類似の習俗が存在している。いずれも祭礼や行事のなかに組み込まれており、関係者の間では「つるし飾り」の総称で呼ばれている。最初に述べたように柳川の観光ひな祭りは九

州一円の観光事業ネットワークに組み込まれるばかりでなく、そのつるし飾りの特性をいかして全国的な観光事業ネットワークも形成している。このような九州を超えた連携は「日本三大つるし飾りサミット」の名称で観光に付帯する交流事業として実施され、平成 21 年には 2 回目のサミットが柳川市で開催された。サミットは柳川市のほかに類似のつるし飾り習俗を持つ静岡県伊豆稲取と山形県酒田市を中心に観光事業や行政関係者らが集まり、各地の「つるし飾り」の来歴や観光事業の現況などについて意見交換をおこなう。今回のサミットの「共同宣言」では、全国でも珍しい「つるし飾り」の伝統をもつ三つの地域が相互に連携を深めこれを貴重な観光資源として活用することをおして地域振興のために協力していくことが確認された。

④ 民俗の脱地域化とネットワーク化：

「ひなの国九州」の冊子制作や「さげもんサミット」の取り組みに包含される意義は、関係者が地域のひな祭り行事やさげもん飾りの関係や連携を確認することだけではない。観光客に対してはそれぞれのひな祭り行事を比較対照する機会が提供される。それは観光客にとどまらず地元住民にも同様の機会をもたらしめている。そうした比較によってひな祭り相互の細部の違いがあらためて確認され、結果的にそれぞれの地域行事や民俗工芸の特徴や独自性がいっそう浮き彫りにされる。ひな祭り行事をめぐるこのような冊子化や連携イベントの取り組みは、行事間の共通性や関連性を明らかにするばかりでなくそれぞれの独自性を顕在化もしており、各行事の観光資源としての価値をいっそう高める役割を果たしている。

柳川の女兒の初節句行事はまずその観光事業化によって他者のまなざしに供する新たな公的行事として再構築され、また地域を超えた行事のネットワーク化によって地域色を強調しその観光資源としての価値を高めている。そこには地方色や地域性のような一見排他的な特性に資源化の価値を見出してきた観光事業が、地域を超えたより広い関係性を構築することでさらなる資源的価値を獲得していくプロセスを見ることができる。

5. 「さげもん」の商品化ー市場と販路の形成ー

柳川のひな祭りの観光化は家庭行事の地域イベント化だけでなくさげもん作りにもさまざまな変化をもたらしている。そのひとつはさげもんの商品化である。もともとさげもんはハレの日の民具として母親や祖母（あるいは近しい知人の女性たち）によって手作りで準備されてきた。こうしたさげもんの用途や製作過程は今も受け継がれており、ハレの日の手作り民具としてのさげもんの性格は基本的に変わりが無い。しかし、近年、それまで手作りで準備されてきたさげもんを既成品として購入する傾向が増えている。地元の女性たちによってつくられた既成のさげもんを自分たちの子どもや孫のために買い求めるのである。したがって地元の女性たちの間ではその販売を念頭においたさげもん作りが盛んにおこなわれている。このさげもんの商品化やその製作の外部化の傾向をよくあらわしているのが、年に一度開催される大規模な即売会である。

地元の女性たちによって販売を前提に作られるさげもんは、一部の人形店や土産品店などに卸されるほか、年一回の大規模即売会や祭りの期間中に婦人会館や商店街の特設コーナーにおいて販売される。なかでも年一回の「さげもん展示即売会」はさげもんの種類や量において最

も規模が大きい。平成 20 年度の即売会は市の「農村環境改善センター」において行事の最初のイベントとして二日間にわたり開催されている。この即売会にさげもんを出店しているのは柳川市婦人会と市シルバー人材センターの二団体であり、婦人会とシルバー人材センターはさげもんめぐり期間中、市内の婦人会館や商店街でもさげ蒙の展示即売をおこなっている。

これらの場所で販売される品々は、言うまでもなくさげもんが中心であるが、婦人会やシルバー人材センターの活動のなかで作られたさまざまな手作り品（アクセサリー、実用小物、手芸品など）なども大量に陳列され販売される。会場は二日間、初節句のさげもんを求める客やその他の手芸品、小物類を買い求める地元客でごったがえす。さげもんを求める客は品質がよく値段が手ごろな品を買い求めるために早めに会場を訪れる。ここのさげもんにはそのひとつひとつに製作者の名前と値段を書いた紙片が下がっており、地元住民による手作り感が色濃く漂う。丈が 1m 近い大振りの立派なさげもんになると一連で 4~5 万円近くの値がつく。普通、左右一対で飾るためこうしたさげもんを揃えると 10 万円近い出費になる。即売会も二日目（最終日）ともなると大部分のさげもんには売約済みの札が下がり、ここのさげ蒙の人気の高さをうかがわせる。初節句用のさげもんは市中の人形専門店でも購入できるが、値段の手ごろ感と製作者の顔の見える手作り感が即売会の人気の理由になっている。

6. 「生活さげもん」と「土産さげもん」

商品化したさげもんに関してその用途をさらに細かく見てゆくともうひとつの側面を見出すことができる。それはさげ蒙の観光土産品としての側面である。さげもんは、たとえそれが手作りでなく購入されたものであても、家庭の初節句祝いに用いられるひとつの生活用具であった。しかし、こうしたさげもんは今や地域をあげての観光開発において地域の生活習俗の文脈から切り離され、外から訪れた観光客の旅の思い出の品や部屋を飾るインテリアとしての性格をもつようになっている。市中のみやげ物店や人形店には、いわゆる「生活さげもん」とは大きさや趣を異にする「土産さげもん」が並んでいる。時代の変化や観光化のなかで伝統的な「生活さげもん」は製作過程における外部化やその用途・目的における商品化などにより、本来の手作りの生活民具とは異なる多様な使われ方や機能の側面をもつようになっているといえる。

7. 生涯学習における「さげもん」

観光化を契機に柳川のさげもんには新しい変化の波が押し寄せている。それはさげ蒙の商品化であり、それにとまうさげもん製作の外部化である。家族や親戚など親密な社会関係の内部で用いられていた「うち使い」のさげもんは、他人に向けた初節句用品や土産物として製作、販売、あるいは購入されるようになった。このさげもん作りの外部化やその商品化はそれに関わる地域の女性の生活にも影響を及ぼしている。それは女性たちの学習活動や副業、あるいは趣味活動などさまざまな方面に及んでいるように思われる。

地域婦人会やシルバー人材センターはさげもん作りのひとつの拠点となっている。しかし、そこでは単に販売目的でさげもん作りがおこなわれているわけではない。また二つの組織は決

してさげもん作りだけをおこなっているわけではなく、多様な活動や仕事のひとつとしてさげもん（および手工芸品）作りをおこなっている。結果的にその売り上げが個人の収入や活動資金になったりもするが、そこでのさげもん作りはまずもって地域に生活する中高年女性のエンパワーや自己実現を目的とする生涯学習や趣味活動の教材として位置づけられている。婦人会では頻繁にさげもんの講習会や集まりの機会を持ちながら技術向上や女性ネットワークの維持に結び付けている。シルバー人材センターにおいても定期的に講習会を開いて裁縫技術の相互学習や情報交換をおこない相互の親睦と健康福祉の向上につとめている。

もともと柳川では副業としてのさげもん作りは存在していなかった。観光ひなまつりによる地域振興事業のなかでさげもんの商品化、土産品化がすすみ、「生活さげもん」以外のさげもん作りの需要が生まれ、その結果、商品としての販売を前提とする副業も生み出された。「商品さげもん」の作り手は地元の中高年女性を中心であり、うち使いの生活用具として作るのとは異なり、趣味と副業を兼ねた性格を持っているように思われる。材料費も高額で販売目的におこなうにはそれほど効率の良い副業とはいえないとも言われる。柳川の現在のさげもん作りは単に副業目的の商品としての側面だけでなく趣味や生涯学習の教材としての側面ももっているのである。

さげもん作りはその技術や細工物においても多様な展開を示している。例えば地域のなかで作者の高い技術と美的センスが認められた結果、作家の固有名をともない「作品化」するさげもんや「民芸作家」も存在している。それは女性の伝統技能におけるひとつの専門職化や職人化をあらわしている。しかし、多くの女性たちは趣味と実益をかねたさげもん作りを楽しむ人びとであり、彼女たちの幅広い活動が地域の観光事業や地域活性の基盤となっているといっても過言ではない。そして彼女たちも日々個人的な創意工夫によってさまざまな趣向や新作を生みだしている。女性たちの日常的でささやかな挑戦は、さげもんの伝統的形態に新しい要素を付け加える契機ともなっており、「アマチュア民芸家」の女性たちにとってはそれこそがさげもん作りの楽しみや意欲を生みだす源となっているといえるだろう。

8. 「資源」としてのさげもんの重層性

柳川のさげもんは地域の観光化事業の文脈のなかでますます複雑かつ重層的な性格を帯びるようになっている。例えば、販売目的でさげもんを作る副業としての経済的側面が現れ、それに従事する女性も増えている。これには婦人会やシルバー人材センターも関わるけれども、そこは基本的に営利だけを目的とするものではない。両組織におけるさげもん作りは婦人会活動や高齢者福祉活動の一環であり、広い意味で生涯学習の範疇に含めることができる。この場合のさげもんは単なる販売目的の商品ではなく趣味の学習や社会教育活動における教材としての性格を持っている。また一部の学校では郷土学習や総合的学習の教育用教材としてもさげもんが用いられている。

柳川のさげもんが示すこのような多様な性格に関しては近年、日本の人類学研究のなかで導入が試みられている「資源」という視点を援用することでその多面的で錯綜したあり方を整理することができるように思われる（注4）。この「資源」の視点から見た場合、まず柳川のさげ

もんは観光活動を媒介させた文化資源としての側面を持っている（山下 2007）。もともとさげもんは女兒の初節句祝いの飾り物として家庭内で手ずから製作される生活用品だった。それが行政の観光振興によって外部者のための観光資源として対象化され活用されるようになった。観光振興政策のなかのさげもんは、地域の貴重な「文化資源」として語られつつある。以上のように、なによりまず柳川のさげもんは観光における文化資源の側面を持っている。

またさげもんは販売を前提とする商品化という契機によって資源としての「小生産物」の側面を持つといえる（小川 2007）。小川は「日々の消費に流されるように流動的で、液状的でもある私たちのアイデンティティ形成に不可欠な素材」として「小生産物」に注目する（小川 2007：20－21）。彼によればこの「小生産物」は大規模生産物ではないがある程度「大量」に作られ、地域限定を売り物に手業・手技を必須の工程とし、商品としての使用価値・交換価値を持つ（同書：13－14）。現代のさげもんの持つ諸相もこのローカルな資源として生活の中から切り出された「小生産物」にほぼ重ねることができる。ただ柳川のさげもんの場合、小川の指摘する消費という行為よりむしろその製作（生産）活動をとおして女性たちのアイデンティティ形成に影響を及ぼしていると考えられる点が興味深い。

さらにさげもん作りには知識資源としての伝統技術・技能の側面も含まれる（ダニエルズ 2007）。さげもん作りとその拡大、継承を支えるのはこうした伝統技術の知識基盤である。さげもん作りの知識資源としての特徴は、基本的にそれが誰にでも開かれ秘密化されない知識であるにもかかわらず男性に対し排他的な布置をとまっている点である。現実には女性の占有知識になっているさげもん作りの伝統技術・技能の背景には、裁縫や手芸を女性の技術として文化的に規定してきた日本の民間技術史が横たわっている。さげもんが裁縫や手芸の伝統技術・技能にもとづいているが故にその知識資源の社会的配分においてはジェンダー化された不均衡が見られる。しかし男性を排除するこうしたさげもんの知識資源のあり方こそが、地域社会における女性の生活や人生において重要な役割を果たしていることにつながっていると考えられる。

最後にこれらさげもんが地元婦人会やシルバー人材センターあるいは民間の趣味サークルにおいて製作される実態からは、手芸技能の習得や向上のための「教材」といういわば「教育資源」としての側面も浮かび上がってくることを付け加えておこう。

このようにさげもんやそれを取り巻く行事を「資源」という人類学の概念で捉えていくとき、柳川のひな祭りやさげもんが行政や観光関係者の政策の次元から人々の生活の次元にいたるまで多面的で多層的な性格をもって資源化されている現状が見出されるのである。

おわりに

柳川のひな祭りとさげもん作りは母親や祖母からその女の子どもや孫へ女性を軸にした世代間関係にそって家庭内領域を中心に受け継がれてきた。それらは地域独自のいわばジェンダー化された産育習俗であり民俗工芸でもあった。とりわけさげもんに関しては少子化や生活様式の変化によってその伝統技能の継承や存続が危ぶまれていたけれども、ひな祭り行事の観光資源化を契機として、地域の中高年の女性たちによるさげもん作りが活発化している。女性たち

は婦人会やシルバー人材センター、あるいは民間の文化サークル、自宅などのさまざまな場でさげもん作りを楽しむようになっている。また期間中、自宅を開放してそれらを観光客に披露し外来者とのさまざまなやり取りを楽しむ女性も少なくない。柳川のひな祭り行事の観光化は、地元の経済効果のみならず、初節句行事の地域イベント化やさげもん作りの活性をとおして、中高年女性の生活の質や女性を中心とした地域の結びつきにも積極的な影響を及ぼしているように思われる。

(＊小論のもとになった資料は 2008 年、2009 年の柳川「さげもんめぐり」期間中、断続的に実施された現地調査にもとづいている。また日本玩具博物館館長の井上重義氏からは「ちりめん細工」の復興・普及活動に関する資料の提供を受けた。記して感謝いたします。)

<注>

(注 1) 地域の固有の行事や生活習俗を観光のための資源として活用しようとする流れは、今日の日本では全国的に見られる現象である。(川森 2001、岩本 2007) いや、世界遺産への登録をめざす各国の積極的な取り組みを見るならそれは国際的にも共通の現象といえる(山下 2009)。また生活習俗や伝統行事の観光資源化に関してはこれまでも観光人類学の領域で頻繁に扱われてきており(山下 1996、1999、2007)、さげもん及びこれを中心とするひな祭りに関してもその延長上に位置づけられる問題意識としてある。

(注 2) 井上はかつての裁縫お細工物のなかに日本女性の優れた伝統の手技と美意識を見出し、その収集と保存活動を精力的にすすめた。1990 年代にはそれらに「ちりめん細工」という平易な呼び名をあてるなどの工夫をおこないつつ、出版や指導者育成、講座開講などの活動をとおして「ちりめん細工」の復興と普及につとめている。井上によれば柳川のさげもんの観光ブームも「ちりめん細工」への関心を広めるうえで一定の役割を果たしているという(井上 2008 配布資料 p 4)。今日のちりめん細工は中高年女性の趣味の手芸としてカルチャーセンターの講座などを中心にさかんに製作されている。

(注 3) 大藤が取り上げた鹿児島枕崎の小猿の細工物に関しては、柳川のさげもんに類似した三月節句のつるし飾りの習俗としても興味深い(大藤 1999 : 229-239)。

(注 4) 人類学研究における「資源」概念の導入はその分配、活用という視点を通して人間社会の理解に新たな光を当て、「資源という語をいわばマスターキーとして使い、人びとが身の回りの世界の事物をいかに分かち合い、利用しているか、またそれをとおして、人と人の関係をいかに調整しているかを探る」(内堀 2007 : 41) 試みである。その射程には観光資源からローカルな地場産業が生み出す小生産物(商品)なども広く含まれており、柳川の観光さげもんの理解にも有効な視点を提供することが予想される。

<参考文献>

- クリスチャン・ダニエルズ 2007「資源としての伝統技術知識」『資源人類学 01』 pp. 75-108. 弘文堂。
- 九州ひなまつり広域振興協議会 2009『ひなの国九州ー絢爛豪華な春が来るー』（リーフレット）
- 井上重義 2008「ちりめん細工の復興について」『ちりめん細工・春の寿ぎ展』（北九州市立小倉城庭園 講演会配布資料：2008.12.13）
- 2004「ちりめん細工の復興活動」『日本玩具博物館開館 30 周年記念誌』 pp.18-21. 日本玩具博物館
- 岩本通弥（編）2007『ふるさと資源化と民俗学』 吉川弘文館
- 川森博司 2001「現代日本における観光と地域社会ーふるさと観光の担い手たちー」『民族学研究』 66（1）： 68 - 84
- 小川 了 2007「序ー躍動する小生産物」『資源人類学 04』 pp. 13-21 弘文堂。
- 大藤ゆき 1999「ヨモザイー三月節句のククリザルー」『子育ての民俗』 pp. 229-239. 岩田書院
- 尾崎織女 2008「ちりめん細工とその文化」『ちりめん細工・春の寿ぎ展』（北九州市立小倉城庭園 講演会配布資料：2008.12.13）
- 内堀基光 2007「序ー資源をめぐる問題群の構成」『資源人類学 01』 pp. 15-43. 弘文堂。
- 山下晋司 2007「文化という資源」『資源人類学 01』 pp. 47-74. 弘文堂。
- 1996『観光人類学』 新曜社
- 1999『バリーー観光人類学のレッスンー』 東京大学出版会
- 2009『観光人類学の挑戦ー「新しい地球」の生き方』 講談社

Children's Folk Culture Events and Vitalization of Community: The Role of *Sagemon* in Girls' First Seasonal Festival in Yanagawa

Ikko SAKAMOTO

In recent years, the administrative approach to invite tourists and create related industries through the use of regional folk culture and traditional events in tourism, as a part of their regional promotion policies, has become a national phenomenon. One example of such an approach is the tourism business of *Girls' Festival on March 3* – a traditional girls' first seasonal festival held throughout Kyushu with the advent of the spring tourism season. Yanagawa City of Fukuoka Prefecture (in the Kyushu district) also participates in this festival; however, it has a unique feature of hanging numerous small, beautiful handicrafts called *Sagemon* made from silk crepe (small-sized handmade stuffed figures, depicting animals and plants) on both the sides of the traditional girls' festival dolls. *Sagemons*, decorated along with the girls' festival dolls, are time-honored craft tradition carried on in the local community, handcrafted by mothers and grandmothers of girls who are of the age to celebrate their first seasonal festival, wishing them happiness and sound growth.

Today, the family celebration of Yanagawa has opened up to a wider region and to tourists through the use of the Yanagawa girls' festival and the *Sagemons* displayed in that festival which have both been passed on as a local life ritual. Moreover, this change has resulted in an increased interest and demand for the *Sagemons* made by the local women. This article reports on the situation where the traditional girls' festival in Yanagawa has been restructured as a "tourism girls' festival" by the administrative tourism promotion policies and consequently is contributing to the revival of the women's traditional art and the vitalization of the community.